

韓国における仏教と死者儀礼の近年の動き

著者	川上 新二
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	69
ページ	43-63
発行年	2007-03-30
URL	http://doi.org/10.15021/00001421

韓国における仏教と死者儀礼の近年の動き

川上新二

駒澤大学総合教育研究部講師

はじめに

近年の韓国社会において、死者への対処法に変化が見られることが指摘されている。例えば韓国の墓は、風水地理的に優れた場所に遺体を土葬して、一人につき一基、土饅頭式に盛り土をして造るのが通例とされてきた。しかし近年では、土饅頭式の墓を造ることを好まない傾向もみられるようになってきているという。その理由は、風水地理的に優れた場所を探すとなると、そのような場所は一般に住宅地や道路から離れた場所になることが多く、そのような場所に墓を造ると墓参りにも不便であり、人の往来が稀になれば墓の場所の記憶も曖昧になり、やがては場所を忘れてしまうことにもなりかねず、結局は訪れる人もいない、祀られぬ死者になってしまうのではないかとことを心配しているためであるという。実際に最近では、祖先の墓を見つけられなくなって墓を失ってしまったり、他人の祖先の墓に参ってしまったりすることがしばしば生じているという。そのため、土饅頭式の墓に代って、近年では納骨堂に遺骨を納めるということが増えてきているという。納骨堂は一族（門中）や家族単位などで設けられることも多く、その普及は政府も奨励しており、予算面などで支援があるという¹⁾。

納骨堂に遺骨を納めるためには遺体を火葬にしなければならないが、1990年時には未だそれほど普及していなかった火葬も〔朝倉 1993:67-69〕、現今ではその普及率が高まっていると聞く。このように死者への対処法に変化が見られる背景には、墓として使用する土地不足の問題とも関わる政府による火葬や納骨堂の普及奨励とともに、近年指摘されている父系意識の変化や祖先祭祀の意識の変化が関連しているとも考えられる²⁾。

このような近年の韓国で見られる死者への対処法の変化の一つとして、韓国仏教の死者儀礼への関与を指摘することもできるのではないかと考えられる。1994年から95年にかけて、ソウル市内にある韓国仏教・曹溪宗の寺院を調査した金賢珠は、「ソウルにある寺院を見ると、一般的に死者儀礼のうち死後49日目に行なう儀礼は一週間に2～3回程度行なわれており、初七日から死後42日目までに行なわれる各儀礼を合わせれば一週間に10余回程度、死者儀礼が実施されている」と報告している〔金 1995:61〕。

これまで、韓国仏教とりわけ曹溪宗に関しては、出家主義で戒律がよく守られており、また、「韓国では祖先崇拜や葬儀は仏教寺院とは関係ない。（中略）韓国では葬儀は儒教で行ない、仏教の法式では行なわれない。つまり仏教は民衆の葬式とは無関係なのであ

る。(中略) 葬儀を普遍宗教から切り離すという習俗をどう解釈したらよいであろうか。葬儀は汚れたものであり、現世的なものであると考えるならば、超時間的な悠久のものをめざす仏教から遮断するということが容易に理解できるのではなかろうか」という見解に代表されるように [中村 1989:252-253]、韓国仏教は死者儀礼とは関わらないとする見方が一般的であったように思われる。

このような韓国仏教のイメージで見ると、近年の韓国仏教・曹溪宗寺院では死者儀礼が頻繁に行なわれているという金賢珠の先の報告に関心がひかれる。近年の韓国では、仏教が死者儀礼に積極的に関与するようになってきているのではなかろうかとも考えられるからである。

ところで、すでに洪潤植は「死者信仰儀礼は(韓国の:筆者注)民俗仏教のなかで最も大きな比重を占めている」と述べ [洪 1980:21]、韓国仏教における死者儀礼の重要性を指摘している。洪潤植は「民俗仏教」を「一般民衆に信仰され、実践されている仏教」ととらえているが [洪 1980:20]、このような「民俗仏教」の概念は、スリランカの仏教文化研究でも知られるE・リーチが提示したPractical Religionや、佐々木宏幹が指摘する「生活仏教」という視点に近いものといえるであろう。佐々木は、地域社会における仏教の研究において、僧職者が何をどう説き、どう行動するか、在家者は仏教を如何に信奉し、生活化しているか、また生活化された仏教と教理・教説はどうかかわっているかなどの問題をリーチが取り上げていると指摘し、このようなPractical Religion (「生活仏教」)の立場に立った日本仏教の研究は、いまだ十分ではないと述べている [佐々木 2002:104-109]。

日本仏教は死者儀礼と密接に結びついているところから「葬祭仏教」、「葬式仏教」などとも呼ばれている。仏教教理学者などからは、無我説すなわち永遠不滅の実体は存在しないとすなわち無我説などの仏教教理とタマや死霊の観念を有する民俗宗教とが出会う領域こそ、日本における「生活仏教」の特色を解明するために欠かすことのできない領域であるとして、日本仏教のかかる側面の研究の重要性を指摘している [佐々木 2002: iii-vi, 62-103]。

韓国の仏教に関しても、「生活仏教」としての側面に焦点をあてた研究は少ないようである³⁾。しかも韓国仏教、とりわけ曹溪宗は出家主義で戒律を守り、死者儀礼は行なわないという従来の見解に従えば、韓国仏教は一般の人々の生活から離れて存在しており、「生活仏教」としての韓国の仏教を研究することは困難であるとの印象を与えるかもしれない。しかし先の金賢珠の報告によれば、近年の韓国仏教では死者儀礼が盛んに行なわれているようであり、それは、近年の韓国に見られる死者への対処法の変化のなかで、火葬を行なう韓国仏教が、死者儀礼の実施を通じて一般民衆に積極的に関与しよ

うとしている状況を示すものではないかとも考えられる。したがって韓国仏教が実施する死者儀礼について考察することは、近年の韓国仏教の動向を検討することになるとともに、韓国での「生活仏教」を研究する一つの方法にもなるのではなからうかと考えられる。

そのため本稿では、韓国仏教の曹溪宗で行なわれる死者儀礼に関して、またそれとともに韓国仏教の死者儀礼を考察するための資料にもなると考えられるところから、円仏教で実践されている死者儀礼についても、僧職者の思考や行動、一般信者の受け取り方、教理・教説と一般信者に受け入れられた仏教との関わりなどに焦点をあてて検討する。そしてそれを通じて韓国仏教の近年の状況を考察するとともに、韓国の「生活仏教」に関する今後のさらなる研究のための手掛かりを得ようとするものである。

1 曹溪宗で行なわれる死者儀礼

曹溪宗も含めて韓国仏教では、死者の霊を靈駕（ヨンガ）と呼び、死者の冥福を祈って仏菩薩に供養し、死者が浄土や天界に生まれ変わるように祈ることを薦度（チョンド）というが〔雨龍 1999〕、このような韓国仏教で行なわれる死者の冥福を祈る儀礼は、以下考察するように葬儀として行なわれるもの、死後長期間経過した死者に対して行なわれるもの、年間で定期的に行なわれるものの3種類に大別することが可能である。

韓国仏教で行なわれる死者儀礼に関して、洪潤植は『梵音集』や『釈門儀範』などの儀礼テキストを中心に死者儀礼の構造について考察を加えており、先に紹介したように金賢珠はソウル市内の曹溪宗寺院において、また岡田浩樹は忠清南道の太古宗寺院において、それぞれ自ら観察した死者儀礼の事例を報告しているが〔洪 1976; 金 1995; 岡田 2001〕、儀礼における僧侶の思考と行動、一般信者の受け取り方、教理・教説と一般信者に受け入れられた仏教との関わりなどについての研究は、いまだ十分ではないようである。ここでは、曹溪宗の僧侶が近年、死者供養に関して一般信者向けに著した『靈駕薦度』という本の内容〔雨龍 1999〕、および筆者が見聞した事例を中心に、葬儀としての四十九齋、死後長期間経過した死者に対する儀礼、年間で定期的に行なわれる儀礼の3種ごとに、それら死者儀礼に対する僧侶と一般信者それぞれの関わり方について検討してみる。

1.1 葬儀としての四十九齋

葬儀として行なわれるものには、遺体を火葬にする茶毘、および死後7日目ごとに49日目まで行なわれる四十九齋と呼ばれる儀礼がある。茶毘や四十九齋は、僧侶によって『釈門儀範』などのテキストに定められた順序に従って実施される。近年ソウルの曹溪宗寺院で行なわれている四十九齋の事例報告や、その儀礼構造の考察については先行研

究があるため [洪 1976; 金 1995], ここでは四十九齋に対する僧侶の考えと, 信者側の態度を中心に紹介する。

四十九齋に関する僧侶側の説明は, 次のようである。人間の死後に関しては, あらゆる幸福を享受して暮らすことのできる天上界に生まれる場合, 再び人間に生まれる場合, 各種地獄に落ちて苦痛を受ける場合, 動物に生まれ変わる場合, さらにはさ迷う死霊になる場合, そしてそのような輪廻を完全に脱して極楽世界に生まれる場合などがあるが, 死後49日間は, 死者は次の生がまだ決まっておらず, 死後7日目ごとに冥府の10人の王に順に裁かれて来世の行き先が決まる。そのため死後7日目ごとに死者の遺族が仏菩薩を供養する儀礼を行ない, その功德を死者に回向することによって死者に功德を積ませ, また仏菩薩への儀礼を通じて死者に仏教の真理を説き聞かせることによって現世への執着を捨てさせ, 極楽に生まれるようにさせると説明する [雨龍 1999:34, 107-110]。

僧侶は四十九齋に以上のような意味を付しているが, 四十九齋を依頼する人々の考えや行動は, 必ずしも僧侶の意向に沿うものではないようである。例えばフィールド・ワークによる調査からは, 服喪期間の短縮や費用の節約などの目的から, 仏教による四十九齋をいわば利用する人々がいるという事例が報告されている。すなわち儒教式葬儀に正式に従うとなれば, 最長で満2年間喪に服することになり, 一周忌や忌み明けとなる三周忌には人々を招いて盛大に飲食などの振舞いをしなければならない。そこで服喪期間を短縮して49日間で忌み明けとし, また人々への接待の費用も節約するために, 寺院で四十九齋を行なったという事例が報告されている [Janelli and Janelli 1982: 79-82 (樋口他訳 1993:115-117)]。

四十九齋を依頼する人々の態度について, 僧侶側は, 四十九齋を行なうために寺を訪れる人々は寺の台所へ行って洗いものの手伝いさえせず, 寺に一定の金額を納め, 儀礼を行なうときだけやってきて, 祭壇に杯を供えて拝礼を何回かしさえすればよいと考えていると批判する [雨龍 1999:116]。そして僧侶は依頼者たちに対して, 7日に一度ずつ寺に行って儀礼を行なうことで施主としての道理が果たせると考えるのは誤りであり, 自宅にも祭壇 (喪庁) を設けて, 念仏でも読経でもよいから毎日行なうべきであるという。すなわち四十九齋には真心が必要であり, 僧侶に頼るのではなく, 遺族自らが故人を直接極楽に送るのだという姿勢をもって行なわなければならないと述べる。そして真心のない儀礼を行なっても, 死者は墓や寺, あるいは家などにとどまって離れていかないことが多いとも指摘する [雨龍 1999:121-127]。

1.2 死後長期間経過した死者に対する儀礼

死後長期間過ぎた死者に対して行なわれる儀礼とは, 家族に病人がでたり, 仕事や家庭などに問題が生じたりしたとき, それは死者がその当事者や家族に影響を与えているためと判断される場合に, その死者を供養する目的で行なわれるものである。

寺院で僧侶によってそのような儀礼が実施される場合、3日間など比較的短期間で行なわれることもあれば、49日間や100日間という比較的長期間にわたって行なわれることもあるという。また死者の影響を受けているとされる人が自ら寺院や自宅で49日間または100日間、念仏を唱えたり、読経したり、写経したりして死者の冥福を祈るという形で行なわれる場合もあるという。僧侶側の説明によれば、念仏の場合には、阿弥陀仏や地藏菩薩の名号を唱え、その加被力によって死者をよりよい世界に送るとされる。読経の場合には、金剛経、阿弥陀経、地藏経、観音経、薬師経、法華経などが選ばれるが、読経の前後に、「この経を読む功德を○○○（故人の名）霊駕に捧げます。仏菩薩の加被を受けて、苦しみの奈落から抜け出て、よいところに行くように」とか、「この経を読む功德を○○○（故人の名）霊駕に回向します。この功德で○○○霊駕がよいところに行くように」などと3回ずつ唱えなければならないということである。すなわち読経の功德を死者に回向するのである。写経の場合も、写経の功德を死者に回向して、死者に功德を積ませるとされる〔雨龍 1999:83-106〕。

筆者がソウルで出会った男性から聞いた、死後長期間経過した死者への対処についての事例は次のようである。ソウルに住む男性（30歳くらい）の両親はともに60歳で、2人とも仏教を信仰している。特に母親は熱心で1ヶ月に2回くらい、日曜日に寺に行っている。姉（35歳）も、母と一緒に寺に行くことが多い。以前はソウル市鍾路区にある太古宗の寺に通っていたが、その僧侶が亡くなってからはソウルの北漢山にある曹溪宗の寺に通っており、現在もその寺に通っている。

その男性の家系では、嫁にきた女性たちが命を全うすることができずに、途中で死亡してしまうことがとても多かったということである。その家系では「嫁にきたなら3年を無事に過ぎなければいけない」といわれていたようで、男性の母は父の3番目の妻であり、父の最初の妻と2番目の妻も早死にしまったということである。父親は6人兄弟の末っ子（兄3人、姉2人）であるが、3人の伯父（父の兄）たちも皆最初の妻が早く死んでしまい、全員2回結婚している。またその男性の家では、家族が病気になるなどのよくないこともしばしば起こった。

その男性の母親が以前通っていた太古宗の寺の僧侶によれば、その男性の家系の祖先たちのなかに問題のある祖先がいるために、そのような禍が起こるということであった。そこで母親は嫁入りしてから数十年の間、熱心に寺に通って禍をもたらす祖先を供養しながら無事に過してきた。禍をもたらす祖先を寺で儀礼を行なって供養すれば、数年間、家庭は平穏になるが、少し経つとまた悪いことが起こる。そのため母親は2、3年に1回ずつ僧侶に依頼して寺で祖先を供養する儀礼を行なっている。祖先を供養する儀礼は、以前通っていた太古宗の寺では本尊の観音菩薩に、現在通っている曹溪宗の寺では本尊の釈迦如来に向かって、若干の供物などを供えて行なう。僧侶は読経や祈願文を唱え、母親が拝礼を繰り返す。本尊に向かってだけでなく、その他、祖先を浄土に導いてくれ

るように地藏菩薩に対しても儀礼を行ない、山神を祀っている山神閣でも儀礼を行なう(94年5月調査)。

1.3 定期的に行なわれる儀礼

年間で定期的に行なわれる死者儀礼とは、寺院に預けられた位牌に対して、陰暦正月、百中(陰暦7月15日)、秋夕(陰暦8月15日)などに行なわれるものである。

先学によれば、未婚で死亡した娘の位牌をその母親が寺院に納め、僧侶が定期的に供物を捧げ読経して供養しているという例が報告されており、また水子供養も近年仏教寺院で盛んに行なわれているとの報告もある [Janelli and Janelli 1982:121 (樋口他訳 1993:174); 淵上 2002]。これらの事例は、儒教祭祀では未婚で死亡した者は祭祀を受けられないとされるが、そのような儒教祭祀では扱われない死者の供養を仏教寺院が担当していることを示すものとみることもできる⁴⁾。

その他には、自宅で儒教祭祀を行なう代わりに、位牌を寺院に預けて寺院で祖先の供養を行なってもらおうというケースも見られる。筆者が出会った事例を紹介すると、次のようである。慶尚南道蔚山市に住むAは四人兄弟一人姉妹の長男で、曾祖父母、祖父母、父母の祭祀を行なっていた。その当時はAの父の弟たちとその家族も、Aの家に来て祭祀に参加していた。Aの死亡後、AとAの父母の祭祀はAの妻が行なうことになったが、Aの祖父母と曾祖父母の祭祀は、Aの父の2番目の弟の家で行なわれることになった。そして現在、その家では祖父母と曾祖父母、それにAの父の2番目の弟の先妻を加えて計5人の位牌を釜山市のある寺に預けて、祭祀を行なってもらっている。

一方、夫と夫の両親の祭祀を受け継いだAの妻は、子供たちは皆娘なので祭祀を引き継がせることができず、また夫の弟たちは祭祀を引き継ぐことに難色を示している。Aの妻は70歳の高齢となって祭祀の準備をするのが一層大変になったので、夫とその両親の3人の位牌を蔚山市にある曹溪宗の寺に預けることにした。祭祀を行なう家の主婦は祭祀の供物に加えて、祭祀に参加するために家に来る人々の食事も用意しなければならず、それが大きな負担となる。主婦たちにとって自分の家で祭祀を行なうことには大きな負担が伴う。

寺に位牌を預ければ各祖先の命日ごとに祭祀を行なう必要はなく、陰暦正月、百中(陰暦7月15日)、秋夕(陰暦8月15日)の年3回行なえばよいということである。そして、寺に経費を納めればすべて寺側で儀礼の準備をしてくれるということである。筆者は1994年8月の百中節にAの妻たちに同行して寺で行なわれた儀礼を見学したことがあるが、そのときには本堂の祭壇に14の位牌が置かれ、5家族が参加した。Aの家族の位牌は2つで、Aの両親の位牌が1つ、Aの位牌が1つである。すなわち夫婦は1つの位牌に祀られ、位牌ごとに経費を納めるということである。また当日集まった人々は、すでに寺に納めた経費とは別に位牌ごとに1万ウォン紙幣を供えていた。

筆者が同行した一家の場合では一緒に行ったAの妻、Aの2番目の弟の妻とその子供たち、Aの3番目の弟夫婦とその息子がそれぞれ1万ウォン紙幣を供えた。このように寺に納める経費や位牌に供える紙幣の金額がかかっても、自宅で供物や食事の用意をするよりは安上がりで、しかも準備の負担もなくて楽であるということであった。僧侶が読経する間、各家の代表者（ほとんどが女性）が順に本堂に祀られた各家の位牌に向かって拝礼をした。寺に位牌を預けても、また寺から位牌を返してもらうこともできるということである（93年10月および94年8月調査）。

このように近年、自宅で儒教祭祀を行なう代わりに、寺院に位牌を預けて供養儀礼を行なってもらう事例も見られるようになってきているが、それは、祭祀が順調に受け継がれないという事情や、祭祀を準備するための苦勞からの解放という女性（主婦）側からの要求が、その理由となっているようである。

以上、曹溪宗寺院で行なわれている死者儀礼について、葬儀として行なわれる儀礼、死後長期間経過した死者に対して行なわれる儀礼、年間で定期的に行なわれる儀礼に分けて紹介した。いずれの儀礼においても僧侶側は先述のように、儀礼を通じて死者に仏教の教えを理解させ、この世で結んだ怨みや執着を捨てさせることによって、また依頼者が仏菩薩を供養する功德を死者に回向することによって、死者を浄土に送ると説き、死者を浄土に送るためには儀礼を行なう依頼者側の真心、熱心さが不可欠であることを強調する。これに対して依頼者側では、儒教式の葬儀や祭祀にともなう負担の解消、さらには死者に由来するとされる禍の解消を仏教儀礼に求めているといえそうである。

2 円仏教で行なわれる死者儀礼

2.1 円仏教と死者儀礼

次に、円仏教が行なう死者儀礼について検討を加える。円仏教は、朴重彬（少太山）が1916年に開教した仏教系の教団である。朴重彬は修行によって悟りを得た後、古今東西の聖人たちが残した教典を研究した結果、『金剛経』が自分の悟った内容と最も一致するところから仏教こそが根本的の真実を明らかにする教えであり、釈尊こそが聖人のなかの聖人であると考え、自己の教えを仏教に依拠するものとしたとされている。円仏教は宇宙の根本原理を円で形象化した一円相を信仰の対象とし、一円相は法身仏ともされる。そして仏教の現代化と生活化を主張して、修養生活を深めるとともに物質生活の向上も目指すこと、四恩（天地、父母、動植物も含めた同胞、および社会の理法や規範という我々の生活に欠くことのできない4つ）を重視すること、自活の能力や教育、社会への貢献を重視すること、などが実践の目標とされる [円仏教教学教材研究会 1989]。

このような円仏教に関しては、「1910年代を中心として形成されはじめた朝鮮におけ

る仏教改革の方向が、既成教団ではその結実をみることができず、少太山の『仏教革新論』による円仏教の発生を通じて歴史的な展開をみることになる。このため円仏教の発生の歴史的意味は、民衆仏教であり、その民衆は主体を自覚した民衆というところに大きな意味がある」と評価されたり [洪 1988:332],「20世紀に入るとともに円仏教が成立した。これは純然たる在家仏教であるが、清らかな生活を尊ぶピューリタンのおもむきがあり、農村の民衆の間に浸透している」などと指摘されたりもしている [中村 1989:269]。

このような円仏教においても、人間は死後再び人間に生まれ変わるためには、生前において執着を離れて、善行を積むことが奨励される。また死後には薦度斎を受けることによって死者の善行が積まれ、人間に生まれ変わることができることとされる一方、生前に執着を離れることができず、悪行を重ねた者は、死後に動物や昆虫に生まれ変わるとされる [月刊円光社 1995]。

円仏教で行なわれる死者儀礼には、臨終を迎えた者に対する儀礼、死後7日目から49日目まで7日ごとに行なわれる四十九斎、死後100日後に行なわれる百日薦度斎、死後相当な期間が過ぎた後に行なわれる特別薦度斎、それに死者の命日に行なう祭祀（涅槃記念祭と称する）などがある。以上のような死者に対する各儀礼は、先に紹介した韓国仏教の曹溪宗寺院などで実施される葬儀としての茶毘や四十九斎、死後長期間経過した死者に対する儀礼、および定期的な儀礼にそれぞれ対応するものであり、また霊駕や薦度など韓国仏教で使われる用語が円仏教でも使用されている。これらのことから、円仏教が行なっている死者儀礼も、韓国仏教が行なう各儀礼に由来するものと考えられ、このような円仏教で行なわれている死者儀礼を考察することも、韓国仏教の死者儀礼を検討するための資料になると考えられる。

2.2 円仏教が定める死者儀礼の目的・意義

円仏教が定める死者儀礼の目的・意義に関して『円仏教全書』の記載から紹介すると、次のようである。まず四十九斎や特別薦度斎などの「斎」に関して、「斎は涅槃人（死者：筆者注）の薦度のために施す法要行事であり、初斎から終斎に至るまでの七七日間、斎を行なうのは、涅槃人の霊識（円仏教では、人は死んでもその靈魂の意識作用は継続すると考え、意識作用をもった靈魂を霊識と称している：筆者注）は、おおよそ七七日間、中陰にいた後、それぞれの法縁にしたがって新たな身体を授かるようになるところから、その間に常に読経祝願などによって清浄な一念を整えさせ、残った執着心を解消させ、善道修行の縁を深めさせると同時に、献供（金品を供えること：筆者注）などによって霊駕の冥福を増進させるためであり、またすべての関係者をして、この期間に追悼服喪の礼を守らせるためである。したがって斎を行なう者はこの2つの意義に留意して、どちらか1つでも欠けることのないようにあらゆる誠意を尽さなければならない」とする。そして、「涅槃日（死亡した日：筆者注）から7日経てば、位牌を安置した場所もしく

は教堂（円仏教では、信者たちが集まって教理を学んだり儀式を行なったりする場所を教堂と称している：筆者注）で初齋を行ない、7日ごとに七齋を行なう。「涅槃後49日すなわち七七日になれば終齋を行なう」とされている〔円仏教中央総務部教政院教化部 1977:621-623〕。

以上は死後49日目までの間に実施される四十九齋に関する規定であるが、死後長期間経過した死者に対する儀礼については、「涅槃人の特別な薦度のために、施主の発願にしたがって涅槃後100日に百日薦度齋を行なうことができ、またその他の場合にも施主の特別な発願によって単独または合同で過去の涅槃人のための特別薦度齋、合同慰霊祭または水陸齋などを行なうことができる」とある〔円仏教中央総務部教政院教化部 1977:624〕。

死者の命日に行なう祭祀については、「祭祀は涅槃人に対する追慕の真心を捧げるもので、その儀式にも2つの意味がある。1つは、清浄な心で仏前に発願し、宿世の業障を解消させ、道門への縁を深めさせ、献供された献金を公共事業に活用することによって涅槃人の未来の冥福を増進し、社会の発展を助けるものであり、もう1つは、涅槃人の在世当時に残した功德を追慕し、子孫代々その根本を忘れないようにさせ、後世の人々が祖先の恩に報いることを勧奨するものである」とする〔円仏教中央総務部教政院教化部 1977:625-627〕。

以上が、円仏教が定める四十九齋、百日薦度齋や特別薦度齋、それに死者の命日に行なわれる祭祀に関する目的・意義である。どの場合においても、死者の「冥福を増進」するために、生者の「追慕の心」や「清浄な心」による誠意が強調されているといえる。

2.3 特別薦度齋の事例

このように各種ある円仏教の死者儀礼であるが、これらのなかで最も数多く行なわれているのが、死後長期間経過した死者に対して行なわれる特別薦度齋のようである〔月刊円光社 1995〕。そこで本稿では、筆者が見聞した全羅南道珍島にある円仏教珍島教堂で布教活動に務めるY教務（女性。円仏教では各地で布教に務める出家指導者を教務と称している）の特別薦度齋に関する経験談を通じて、特別薦度齋における出家指導者と一般信者との関わり方について紹介することにする（95年7月調査）。

A. 珍島に住む当時24歳くらいの若い女性が、身体に痛みを感じる症状が続いたので、光州市（全羅南道の中心都市）の病院で診察してもらったと憂鬱症と診断され、長期間治療を受けていた。しかし症状は改善せず、占い師の話では、27歳で服毒自殺した親戚の男性がその女性に憑いているということであった。女性の両親は霊の憑依などということは信じなかったが、その女性は家では一杯の水も口にせず、食事もせず、言葉も話さず、笑いもしなかったということであり、両親はとても心配になってY教務の起居する教堂

にその女性を連れてきた。そのためY教務は一週間ほどその女性と一緒に過した。教堂に来てからは、その女性は言葉もよく話し、とてもこやかで優しく、毎日Y教務の食事を用意してくれた。Y教務はその女性が気の毒になって、彼女の両親のところに行って彼女に憑いているという霊のために薦度齋を行なうことを勧めると、両親が言うには、その女性には親戚の男性の他に彼女の父方のオバと母方のオジの計3人の霊が憑いているということであった。そこでこれら3人の霊に対する薦度齋を行なってみようということになり、Y教務は女性の両親から10万ウォンを受け取って一週間の薦度齋を行なうことにした。両親は娘の生活費のつもりで10万ウォンを渡したようであった。齋費（薦度齋で祭壇に供える献金）を多く供えるほど霊の供養も容易になるのであるが、今回は齋費の額が少ないので無事に供養できるか心配であった。それでも10万ウォンを七等分して一週間毎日供えることにし、また各霊の名前を記した位牌も供えて夕刻に薦度齋を行なうことにした。

薦度齋の初日、法堂（円仏教における真理の表現である一円相が奉安されている部屋で、ここで信者たちへの教化活動や儀礼が行なわれる）で彼女と一緒に坐って鉦を叩きながら儀礼を始めると、突然Y教務の身体に鳥肌が立って、ぞっとするような寒気を感じた。顔も冷たくなったように感じられ、死体のように青ざめた顔になっているのではないかと思っ、鉦を叩きながら顔を触ってみた。顔には特に異状はないようであったが、冷たい感覚は続いた。初日はそれで終わったが、翌日は一日中身体に痛みを感じた。教務を務める者が一日中横になって過しては、何という怠け者かとその女性や信者たちに誤解されるかもしれないと思っ、起き上がろうとしても、どうしても身体が動かなかった。夕刻になったので2日目の儀礼を行なおうと強いて身体を起こして法堂に入ると、また前日と同じ症状が起こった。そのときY教務には、薦度齋を行なうと霊が儀礼を行なっている者に触ることがあるので、それに押されて負けてしまっ、はいけないという先輩教務たちの経験談が思いあわされた。ある教務などは、薦度齋を行なうと霊が自分に触っ、手足をピクリとも動かすことができないようにさせられたということである。それらの話が思いあわされたY教務は、気持ちをしっかりもって位牌を見つめ、心の中で「今私があなた方を救おうとしているのに、このように私を苦しめて、どうやって救われようというのか。私に触れるな」と叱りつけた。Y教務が気持ちをしっかりもって儀礼を行なうと、3日目からはそのような症状はなくなった。ところで今度は、その女性がある日、儀礼を終えて法堂から出てくる途中で足をくじいてしまった。病院へ行っ診察してもらったが、そのときY教務は、「自分があのように言っ、霊は自分に触れることはやめて、今度は彼女に触れたのだ」と思っ。

Y教務の考えでは、やはり齋費が足りないようであったので、一週間の薦度齋が終了した次の日、大宗師（円仏教の創始者・朴重彬）が誕生した地である全羅南道靈光で行なわれた円仏教の大規模な祈禱行事に彼女を連れていった。多くの人々の気運を受けて

仏に祈祷し、彼女に憑いている霊を追い祓わなければならないと思ったからである。その行事に参加した次には、その女性を連れて全羅北道裡里にある円仏教の本部に行き、「自分としては助けてやりたいが、彼女の家からはまったく協力ががないので自分一人では助けてやることができそうにない」と先輩教務たちにその女性の状況を話した。そして彼女に円仏教本部の修養場で掃除や炊事などをさせながら、そこにおいてもらうことにした。彼女には「修養場で教務たちの手伝いをしながら自分で祈祷しなさい」と教えて、Y教務は珍島に戻ってきた。

B. 珍島で暮らすある青年に5人の霊が憑いて、本人もその家族も苦勞しているという話を、Y教務は知り合いになったその青年の嫂から聞いた。青年に憑依している霊は、その青年の母、オジ、母方のオバなどであり、そのなかには子供のときに死んだ者もいるということであった。それらの霊を祓うためにキリスト教の教会へも行き、珍島の巫女による巫儀(クツ)も数回行なって見たが、どれも効果がなく、現在は全羅南道の木浦で暮らしている姉の家において、一週間のうち5日間は木浦にある祈祷院(都市の郊外や山中にあって、病気治療などを目的に祈祷が行なわれるキリスト教の施設)で過ごし、2日間は姉の家で仕事を手伝っているということであった。その青年は、言わば霊と一緒に暮らしており、憑依している霊の声が聞こえてきて、その指図に従わなければならないということである。夜寝ていても霊たちの指図があれば起き上がってどこかに行ってしまう、一晩中遊び回って帰ってくるということである。また青年に憑依している霊には大人も子供もいるが、それらの霊が食べろと言ったものは食べなければならないということである。例えば、子供の霊がアイスクリームやフライドチキンを買って食べろといえ、それを食べなければならない、大人の霊が酒を飲もうと言え、酒を飲まなければならないという。飲む酒は焼酎ばかりで、それを大瓶で何本も呑もなしに大量に飲んでも胃がパンクするというのではなく、その酒は青年に憑依している霊が飲むということであった。しかしいくら霊が飲むといっても、青年にまったく影響がないということではなく、夜歩き回って酔いつぶれて、どこでも寝てしまうということである。

心配した嫂やオバがある日、その青年をY教務のところに連れてきた。Y教務が初めて会ったときの青年の姿はまともに見られたものではなく、髪は油気もなく纏れあっていて、顔はやつれて青白く、瞳も焦点が定まらなかった。青年はY教務を試すように、円仏教やY教務に人を治療する能力があるかどうかをひっきりなしに尋ねるので、Y教務は、「貴方は病気を治すために来たのか、円仏教の勉強をするために来たのか。私が見たところでは、貴方の健康を守ることが急務のようであるが、そのような態度では私が貴方をどうして指導できるのか。私に任せて薦度齋を通じて健康を取り戻したいのなら、心を固めて明日もう一度来なさい。そうでなければ来るな」といって、その日は帰ってしまった。次の日、青年がまたやってきた。青年は、「朝起きると霊が、今日、円

仏教のところに行けと言ったので来た」といった。昨日は家に帰ると、霊が明日は円仏教に行くと言ったが、今朝起きてみると円仏教へ行けと言ったということである。

教堂で薦度齋を行なうことにし、霊一人一人に位牌を作って祀った。一週間に一度ずつ行なう薦度儀礼では到底効果があるようには思われなかったので、49日間毎日行なった。その時分、教堂ではちょうど百日祈禱を行なっていた時期であったので、毎日祈禱終了後に、祈禱に参加していた信者たちと一緒に薦度齋を行なった。先輩教務たちの経験談では、薦度齋の3日目くらいになると霊たちもおとなしくなるということであるが、この青年の場合も、3日目の儀礼が終わったときにY教務が何か変わりはないかと青年に尋ねると、今は霊たちの声が聞こえないということであった。憑依している霊たちが毎日その青年にいろいろと言っていた声が、だんだん遠くなるようだというのであった。5日目の儀礼が過ぎると、霊たちは何か言っているようではあるが、何を言っているのか聞き取れず、今はゆっくり眠れるようになったということである。

C. Y教務によれば、薦度齋を行なうことを依頼される霊たちの共通点は、若い年齢で死亡したということ、また不幸な死に方をしたということであるという。ある女性の依頼でY教務は、その女性の夫の父、夫の祖父、夫の兄弟の計3人の薦度齋を行なったことがある。夫の兄弟は11歳のときに水泳をしていて溺れて死に、夫の父は40歳代で自殺し、夫の祖父は病死したということである。その女性は円仏教の信者ではなく、珍島邑にある寺に通う信者であったが、その寺でもそれらの人々のための薦度齋を行ない、その他いくつかの寺院でも行なったという。とにかく3、4回薦度齋を行なったが、それでも供養されなかったようである。その女性が毎年正月に一年の運勢を見てもらいに占い師のところに行くと、それらの人々が必ず占いのなかで問題のある死者としてあらわれるということであった。それらの霊は未だ薦度（供養）されていないと感じたその女性は、円仏教の噂を聞いてY教務を訪ねてきた。

Y教務は信者たちと一緒に教堂で一週間、それらの霊のために薦度齋を行なうことにした。ところでそれらの霊はとても力が強いようで、薦度齋を始めたその日からY教務は身体に痛みを感じはじめ、3、4日経った頃、信者の一人にその話をすると、信者たちも身体に痛みを感じて、他人の薦度齋にはもう参加しないという者もいるということであった。それでも信者たちを説得して一週間薦度齋を続けた。すると女性信者の一人が今回の薦度齋は必ず成功するといった。Y教務がなぜそう思うのかと尋ねると、その女性信者は、薦度齋を行なっている間、法堂に霊が入ってくるのを見たというのであった。彼女は普段は霊を見る能力のあるような人ではないが、皆が坐って儀礼を行なっている最中にカチャッと門の開く音がしたので無意識に振り返ってみると、灰色の服を着た背のとても高い男性がニコニコして入ってくるのが確かに見えたといい、それで今回の薦度齋はまさしく効果があったのだ、薦度齋を行なうとあのように霊が入ってくるのだな

あとと思ったということである。薦度齋が終って、薦度齋を依頼した女性が古い師に運勢を見てもらうと、もうそれらの霊はあらわれなかったということである。

D. 以前に、身体が痛いなどの苦しみを受けていた女性の依頼で、その女性の夫の父母、夫の兄弟、夫の祖父母の計6人のために薦度齋を行なったことがあったが、それらの人々は皆30歳代の若さで死亡しており、自殺とか阿片とかただならぬ死に方をしたり、憤懣を抱いて死んだ人々であった。ある日の朝、その薦度齋の依頼者であった女性が、「今日は娘の誕生日なので、誕生日の祈りをあげてほしい」と教堂にやってきた。Y教務が祈禱してあげた後、その女性はまた、「今日は夫の母の命日である。自分は教堂で義母の祭祀を行ないたいのであるが、夫が同意してくれない。これから帰ってもう一度夫を説得してみる」といった。Y教務は「賛成しない人に無理に話をすれば家庭不和の原因にもなるので、貴方が本当に教堂で祭祀をしたいのなら、家でも祭祀を行ない、また貴方の都合のいいときに一人で教堂に来て読経しなさい」と諭したが、彼女は「それでも、もう一度夫を説得してみる」といって帰っていった。

その女性が帰った後、Y教務はふと寝入ってしまったが、自分の周囲に、白い姿の、とても背の高い男性や女性が現れ、また子供も現れた。円仏教の行事が行なわれる会場に行こうとするY教務に、その子供がまわりついて離れないので、Y教務はその子供と一緒に会場に入って席に着いた。会場には多くの教務たちが坐っていたが、会場内でもその子供はY教務にまわりついて煩わしいので、Y教務が「わかった。私が薦度してあげるから、皆こっちに来なさい」というと、子供の他に先ほど見た男性や女性たちも現れて、全員が申し訳ないといいながら頭を下げるのであった。Y教務が「申し訳ないことなどない。心を込めて四十九齋をしてあげるから、そのようにまわりついて人を悩ましたり苦しめたりしてはいけない」と叱りつけると、夢から覚めた。Y教務はそのような夢を見るのは初めてであったが、先ほど女性信者と、その信者の夫の母の命日の祭祀を家で行なうか教堂で行なうかと話し合ったことが思い当たり、その家の人々の霊が現れてY教務に齋(祭祀)を行なってほしいということなのかとも思われた。そこでその日の夕刻、以前に薦度齋を行なった先ほどの女性信者の夫の父母など6人の位牌を祀って祭祀を行なった。Y教務は「今日、貴方(夫の母)の祭祀の日を迎えて、貴方と貴方の夫と、夫の一家の4人の計6人を一緒に祀ってあげるので供養を受けなさい」と諭して、祭祀を行なった。

以上紹介したY教務の経験談から、Y教務や珍島の円仏教に関わる人々の間では、ある人が死霊に憑依されることによって身体に苦痛を被ったり、憑依した死霊の指示通りに行動させられたりすると考えられていること、憑依する死霊は憑依された人の家族や親族の霊であり、またそれらの霊は若い年齢で死んだり、異常な死に方をしたり、怨み

を抱いて死亡した霊と考えられていること、身体の苦痛を取り除くためには薦度齋と呼ばれる儀礼を行なって憑依した霊を供養する必要があると考えられていることなどを窺うことができる。

死者を供養するための薦度齋が行なわれているのは珍島教堂だけのことではない。円仏教の教務や信者の体験談をまとめた『死と薦度』という本には、各地の教堂で行なわれた多くの薦度齋の話が掲載されている〔月刊円光社 1995〕。このように珍島以外の他地域の教堂においても薦度齋が行なわれているが、薦度齋について信者たちの関心は高く、円仏教教団内では信者たちが迷信の方向に流れてはいかないかと心配し、信者たちの薦度齋に対する関心の高さに否定的な見方をする人々もいるということである〔月刊円光社 1995:60〕。しかし信者たちにとっては死霊を供養するための薦度齋は重要な関心事項のようである。

薦度齋に関して、円仏教では先にも紹介したように死者の「冥福を増進」するために依頼者側の「清浄な心」による誠意を強調するが、依頼者側の立場から見れば、円仏教の薦度齋は死者供養の選択肢の一つに過ぎないとさえいえる。紹介した珍島のY教務の事例から、薦度齋を依頼するのは円仏教の信者である場合もあるが、信者でない人々も多いようである。非信者が薦度齋を依頼する理由としては、古い師に家庭のさまざまな不幸は祖先（死者）によるものと判断された場合、巫儀やキリスト教会や他の仏教寺院でその死者に対する儀礼を行なったが効果がなかったため、あらためて円仏教に薦度齋を依頼したということが多いようである。Y教務の経験談や、先に紹介した薦度齋に関する円仏教の教務や信者の体験談をまとめた『死と薦度』と題する本に記載されている内容から〔月刊円光社 1995〕、円仏教に薦度齋を依頼する人々の多くが他の仏教寺院や巫俗儀礼とも関わっているという状況を窺うことができる。

3 仏教における死者儀礼の背景と問題点

3.1 仏教における死者儀礼の背景

これまで、韓国仏教・曹溪宗の寺院で行なわれる死者儀礼、および韓国仏教に基礎を置くと思われる円仏教で実施される死者儀礼について紹介した。これらの死者儀礼は、死者を浄土や天上界に送り、もしくは再び人間の身に生まれ変わらせるために行なわれるものであり、そこには死者の霊に関する観念が存在する。韓国仏教では死者の霊を靈駕と称するが、曹溪宗の僧侶は靈駕について、次のように語っている〔雨龍 1999:5, 37-59〕。

怨み、愛情、財物、権力など、生前に作り出したしこりや未練のこびりついた靈駕は、この世を離れることができずにさ迷う存在となる。これらの靈駕（死霊）は、ときには彼ら自身が存在する領域を越えて人間の領域を侵害する場合がある。例えば、怨みが残っ

ている場合や愛情の未練に引きずられている場合に、その対象となる人間に憑くことがある。また人間が霊力を得ようとして自ら霊駕を呼び入れる場合もあり、さらには、よい世界へ行くことができないでいる霊駕が自分を薦度してくれることを願って、家族や親戚などを訪ねてくることも多い。

そして、どのような場合であれ霊駕が人間に憑くと、その憑かれた人間は自分自身の意思とは関係なく行動するようになる。例えば、空腹な霊駕は人間の身体に憑いて、人間の食べ物を奪って食べるようになる。霊駕に憑かれた人間は、霊駕の指示通りに食べ物を食べなければならなくなる。たとえ霊力を得ようとして自ら招いた霊駕であっても、霊駕に憑かれた人間はその霊駕のためにさまざまな苦痛を被ることになる。このような霊駕による障害は意外にも多く起こっている。

曹溪宗僧侶による以上のような霊駕（死霊）に関する見解は、先に紹介した珍島教堂のY教務の経験談や『死と薦度』と題する本に取められている事例を見れば、円仏教における霊駕の見方と一致することがわかる。さらには、このような曹溪宗や円仏教における霊駕（死霊）に関する見方は、韓国巫俗における死霊観と一致することも指摘できる⁵⁾。すなわち、円仏教も含めて韓国の仏教は、巫俗における死霊観を基盤にして、仏教的解釈や用語を用いて死者儀礼を実施していると解釈される。

そのことは依頼者（信者）側から見れば、仏教の死者儀礼も巫俗の死者儀礼も死者に対処するための選択肢の一つに過ぎないということにつながるであろう。依頼者の立場から見れば円仏教による薦度齋は死者儀礼の選択肢の一つに過ぎないといえることは、すでに指摘した。このことは曹溪宗で行なわれる死者儀礼についても同様といえそうである。先に、依頼者は死者に由来する禍の解消を仏教儀礼に求めているとみられる旨紹介した。曹溪宗の僧侶や円仏教の教務の側では儀礼を行なう際の依頼者側（生者側）の真心、誠意を強調するが、依頼者側からすれば、巫俗儀礼でも仏教儀礼でも円仏教の儀礼でも、死者に関する問題を解決してくれればよいという考えがあるようである⁶⁾。

3.2 死者儀礼に関する仏教側の立場

このように仏教による死者儀礼は巫俗の死霊観を基盤としており、依頼者は仏教や円仏教による死者儀礼を巫俗儀礼とともに死者供養のための選択肢の一つに過ぎないとみているとしても、仏教や円仏教の死者儀礼には、巫俗による死者儀礼と内容的に異なる面がある。すなわち、巫俗儀礼と仏教や円仏教の儀礼との間には死者を扱う態度に相違があることが指摘できる。

死者を供養する巫儀では、死者は巫女に憑依して、巫女の口を借りて生者に対する希望を伝え、生者からは死者への要望が伝えられる。このように巫俗儀礼においては生者と死者との間で具体的なやり取りが行なわれる。死者が語る不平不満に対して、生者がそれに対抗して言い返すこともある。巫俗儀礼においては、生者と死者はいわば対等な

関係に立つといえる。また、生者は死者の欲求も満たしてやらなければならない。生者は死者を供物や歌舞で供応し、十分に楽しませて満足させてあの世に送ることになる。巫俗儀礼では、死者は巫女の口を借りて自分の死に対する不平不満、怨み、希望事項を生者に伝え、生者は死者の言葉を聞いて共鳴したり慰めたりする。また生者が死者の言動の非をたしなめることもある。生者に自己の思いを告げた死者は、供応に満足してあの世に送られる [Kendall 1985:144-163; 任 1988:138-154]。

これに対して仏教（曹溪宗）で行なわれる死者儀礼の内容は、仏菩薩を奉じることによって生者が積んだ功德を死者に回向し、また死者にも仏法を悟らせ、それによって死者は極楽浄土や天上界に生まれたり、再び人間として生まれ変わったりするとされる。仏教の死者儀礼では、死者の怨みや悔い、不平不満を生者が聞いてそれに共鳴し、死者を慰撫するという仕組みはない。ただ生者が積んだ功德を死者に回向し、死者に仏教の真理を説き、それに目覚めさせ、浄土に行かせるという道筋があるだけであり、ここには死者個々の思いを表明させる機会は用意されておらず、死者個々の思いとは関係なく、一律に仏教の真理に従って浄土に送るという仕組みがあるだけである。巫俗儀礼で見られる生者と死者との対等性によって生者が死者の思いを聞いてやるということはなく、死者に個々の思いを捨てさせて仏教の真理に目覚めさせるという、いわば仏の力を介しての死者に対する生者の優位性が指摘できる。仏教儀礼に関するテキストには三宝の「加被力」や「威神力」によって死者を薦度する（浄土に送る）という表現も見られ [全北寺庵僧伽会 1986:189-243]、仏の力によって死者をあの世に送るという姿勢がみられるのである。

円仏教においても、死者儀礼である薦度斎は、死後に新たな身体を授かるように読経祝願などによって霊駕（死者）に執着心を解消させ、善道修行の縁を深めさせることによって冥福を増進させるために行なうとされており [円仏教中央総務部教政院教化部 1977:621-622]、事例で紹介したY教務も、薦度斎の最中に自分に触ってきた死者に対して、薦度斎の妨げとなるそのような行為はしないようにと叱りつけている。ここにも死者に対する生者（依頼者や僧職者）の優位が示されているといえるであろう。

以上のように、曹溪宗や円仏教で行なわれる死者儀礼では、生者と死者との関係は仏（三宝）や読経祝願などの力を介して生者側に優位性があり、死者は各自の思いを表明する機会もなく、一律に浄土に送られ、人間として再生することが求められるといえる。

なお、韓国の仏教が死者儀礼に関わるのは近年に始まったことではない。1900年代の初めに宣教師として韓国に滞在したクラークによれば、「高麗時代の末期まで遡れば、すべての韓国人の葬儀は僧侶の手に握られていた。しかし李朝の王たちはそれを止め、1516年には、人々が両親や他の人々の年忌法要を行なうために寺院へ行くことを禁じさせた」という [Clark [1932] 1961:74]。さらにクラークは、「今日では僧侶はめったに葬式のために個人宅へ行くことはない。しかし遺族は寺院へ行き、（中略）観音の祭

壇の前で特別な供物を捧げて死者への祈りを行なってもらうため、特別な謝礼金を払う。とりわけ陰暦7月15日と陰暦正月に、このことが行なわれる」と述べている [Clark [1932] 1961:74]。クラークが韓国に滞在していた当時も、寺院で陰暦7月15日と陰暦正月に死者への儀礼が行なわれていたようである。しかしその後は本稿の始めにも紹介したように、韓国の仏教とりわけ曹溪宗は死者儀礼とは関係しないという見方が一般的になったようである。

3.3 仏教による死者儀礼の問題点

ところで本稿の始めに紹介した、ソウル市内の曹溪宗寺院では死者儀礼が頻繁に行なわれているとの金賢珠の報告は、1994年から95年にかけて行なった調査に基づくものであった [金 1995]。また本稿で紹介した、曹溪宗の僧侶が死者供養に関して一般信者向けに著した『靈駕薦度』という本は1999年に出版されており [雨竜 1999]、円仏教の教務や信者の体験談をまとめた『死と薦度』という本も1995年に発行されている [月刊円光社 1995]。90年代後半から韓国仏教は死者儀礼と密接に関わるようになってきているとも考えられ、以前には「村人の生活に重要な宗教として根付くことができないでいる」とさえ指摘されることのある韓国仏教が [李, 千 1995:181]、近年、死者儀礼を通じて人々に接近しようとしているとも考えられる。

例えば、死者儀礼の実施に関して曹溪宗のある僧侶は、「もちろん靈駕薦度（死者儀礼：筆者注）は、悟りの宗教である仏教の根本の教えではない。しかし福と徳と智慧の足りない仏弟子においては靈駕薦度も一つの方便になる」と語っている [雨龍 1999:5]。すなわち韓国仏教の僧侶側は死者儀礼を民衆に仏教を布教するための方便とみており、死者儀礼を通じて人々に仏教を浸透させようとしているとみられるのである。

このように近年の韓国仏教が死者儀礼を通じて人々への仏教の浸透を図ろうとするならば、現在の韓国仏教の死者儀礼には次のような問題が見られることも指摘しておかなければならない。

僧侶側は死者儀礼を仏教布教の方便とし、そのため儀礼を依頼する信者に真心、誠意からの儀礼、読経、念仏の実践を求めるのであるが、しかし信者側ではすでに指摘したように、仏教による死者儀礼を巫俗儀礼などと同一範疇に属する死者への対処法の一つに過ぎないとみているといえる。このように僧侶側と信者（民衆）側との間には、仏教による死者儀礼の理解をめぐる開きがある。僧侶側は先述したように死者儀礼に対する信者側の不誠実な態度を批判するが、信者（民衆）側の仏教による死者儀礼に関する理解には、僧侶側にも問題はあるといえる。

先に仏教と巫俗による死者儀礼の相違点として、生者と死者との関係から見ると、巫俗儀礼では生者と死者が対等な関係にあり、仏教儀礼では生者が死者よりも優位に立つという相違があると指摘したが、このような相違は仏教側の立場に基づく理念的なもの

であるということができ、現実の儀礼の場では巫俗と仏教による死者儀礼の相違は曖昧になる。

先述したように、個人や家庭にさまざまな不幸を与えているとされる祖先すなわち不安定化した死者に対処するために巫俗儀礼や仏教による儀礼が行なわれる場合も多いが、韓国の各地の巫俗で「数年に一度はクツ（巫俗儀礼）をするべきである」などという言葉が聞かれるように [Janelli and Janelli 1982:159（樋口他訳 1993:234）；Kendall 1983:121-122]、現時点では安定している死者であってもいつまた不安定化して生者に禍を及ぼすとも限らず、不安定化を未然に防ぐために、または死者が不安定化するたびに再度の安定化を図って巫俗儀礼が行なわれる。先に巫俗儀礼では生者と死者は対等な関係にあるとしたが、このように巫俗では死者が不安定化して生者に影響を与え続ける可能性が常にあるため、死者の方に優位性があるということもできる。

仏教や円仏教の死者儀礼である薦度斎は、その考え方に立てば、一度薦度された死者は浄土に往生したか、次の生として天上界に生まれたか、あるいは人間の身を得たのであり、死者と遺族との関係はいわば切断されることになるといえる。したがって巫俗で見られるように、死者が継続的に生者に影響を与えるようなことはないということになる。しかし実際に韓国社会で行なわれている仏教儀礼では、一度薦度斎を受けた死者でも完全に安定した状態になるのではなく、生者に影響を与え続ける場合があるようである。本稿では、ある寺院に通う家族には問題のある祖先（死者）がいて、何年かに一度ずつその祖先（死者）のために寺院で儀礼を行なわなければ禍が生じるとされている事例を紹介した。このように仏教による死者儀礼を行なっても、死者を完全に安定した状態にすることはできず、何年かごとに儀礼を行なわなければならないという巫俗儀礼と同様の状況も見られるのである。

死者は常に不安定化する懸念があり、死者の不安定化を避けるために定期的に儀礼を行なわなければならないとするならば、依頼者側から見れば、死者を扱う姿勢に関して巫俗と仏教の間には違いが認められないということになるであろう。僧侶側が依頼者側の不誠実さが死者の薦度を妨げるといくら主張しても、仏教儀礼には死者を完全に安定化させる力があるということを依頼者側に納得させることができなければ、依頼者も巫俗儀礼と仏教儀礼との相違を認めることはできないのではなかろうか。仏教の独自性に立って死者儀礼の確立を考えるとすれば、功德の回向、読経や祝願の力、仏の加被力や威神力によって完全に死者を浄土に送り、生者に死者の影響が及び続けるようなことはなくなるという立場を確立し、それを信者、民衆に浸透させることも、仏教による死者儀礼の特徴を信者側に理解させる方法の一つになるのではなかいかと思われる。

おわりに

近年の韓国仏教には積極的に死者儀礼に関わろうとする姿勢が見られるようであり、仏教と死者儀礼との関わりを検討することが「生活仏教」としての韓国仏教を考察する一つの視点になるのではなかろうかという立場から、本稿では曹溪宗と円仏教で実施されている死者儀礼を取り上げて、それに関する僧職者側の考えや行為、信者（民衆）側の受け取り方、儀礼の場における曹溪宗や円仏教の教義と韓国の民俗宗教である巫俗との関係などについて考察した。考察を通じて、僧職者側は死者儀礼に関して、遺族が儀礼を行なう功德を死者に回向することによって、また儀礼を通じて死者に仏教の教えを聞かせて執着心を解消させ、正しい法を悟らせることによって、死者を浄土に送り、または再び人間に生まれ変わらせると主張するが、信者側はそのような仏教や円仏教による死者儀礼を、巫俗儀礼と同じ範疇に属する死者への対処法の一つとみているに過ぎないと思われることを指摘した。そして、仏教や円仏教が巫俗の死霊観の基盤の上で死者儀礼を行なっている点、また現実の儀礼の場では巫俗儀礼と同様に仏教儀礼においても死者の生者に及ぼす影響力を完全になくすることができない場合が見られる点から、僧職者側は信者に対して仏教儀礼と巫俗儀礼の相違を明らかにできないのではないかと指摘した。さらに、巫俗儀礼とは異なる仏教による死者儀礼の独自性を確立するためには、仏（三宝）の加被力や威神力、読経や祝願の力を通じて死者を完全に浄土に送り、死者が生者に影響を与え続けるようなことはなくするという立場を明確にすることが必要なのではないかとも述べた。

本稿で紹介したような死者儀礼に積極的に関わり、そして死者儀礼を方便として仏教を民衆に布教しようとする韓国仏教の姿勢は、本稿の始めにも述べた近年の韓国における火葬や納骨堂の普及などに見られる死者への対処法の変化、さらには韓国社会における父系意識や祖先祭祀の意識の変化とも関係があるのではないかと推測される。すなわち、このような死者への対処法や社会意識の変化が、仏教に死者儀礼を通じて民衆に接近する機会を与え、また民衆に死者への対処法の選択肢として仏教儀礼を視野に入れさせる背景になっているという可能性も考えられる。韓国仏教の動向、変化に関してさらに詳細な調査が必要と考えられる。

注

- 1) [朴 2005]、および筆者のソウルでの見聞（2005年10月）による。
- 2) 近年の韓国における父系意識の変化や祖先祭祀の変化については、[秀村 2001, 2005]などの報告がある。
- 3) そのなかでは、韓国仏教を祈祷仏教としてとらえた柳東植の研究が注目される [柳 1978:156]

-178]。

- 4) 儒教祭祀で扱われない死者と巫俗儀礼、および仏教儀礼との関係については、[崔 2004:195-199; 川上 2005]などを参照。
- 5) 巫俗における死霊観に関しては、[崔 1991:151-165 (重松訳 1992:189-208)]などを参照。
- 6) キリスト教の場合についても鈴木によれば、調査地の村の人々は従来の民間信仰の代替としてキリスト教教会に通うことを選択しているという [鈴木 2001]。

文 献

朝倉敏夫

1993 「韓国の墓をめぐる問題」 藤井正雄, 義江彰夫, 孝本貢編『家族と墓』早稲田大学出版部, pp.63-80。

崔 吉城

1991 『韓國의 祖上崇拜』(増補版), 礼典社(ソウル)(重松真由美訳 1992『韓國の祖先崇拜』御茶の水書房)。

2004 「韓国における祖先崇拜の歴史と現状——男児選好の問題を中心に」池上良正他編『岩波講座宗教6・絆』岩波書店, pp.187-213。

Clark, Chales Allen

[1932] 1961 Religions of Old Korea, Reprint. Seoul; Society of Christian Literature.

淵上恭子

2002 「韓国仏教の〈水子供養〉——民衆仏教の生命論と仏典理解」『宗教研究』76巻2輯, pp.181-207。

月刊円光社

1995 『죽음과 천도』月刊円光社(裡里)。

秀村研二

2001 「位牌をもちいない祖先祭祀——伝統としての『儒教社会』の諸相」『伝統と前衛』明星大学日本文化学部共同論集第4輯, pp.245-262。

2005 「チブ, 門中と父系意識の変化」『アジア遊学』74号, 勉誠出版, pp.21-31。

洪 潤植

1976 『韓国仏教儀礼の研究』隆文館。

1980 『仏教의 民俗』東国大学校訳経院(ソウル)。

1988 『韓国仏教史의 研究』教文堂(ソウル)。

Janelli, Roger L. and Dawnhee Yim Janelli.

1982 Ancestor Worship and Korean Society, Stanford: Stanford University Press (樋口淳他訳

1993『祖先祭祀と韓国社会』第一書房)。

全北寺庵僧伽会

1986 『우리말 불교의식집』호암出版社(ソウル)。

川上新二

2005 「韓国における仏教と祖先崇拜に関する一考察」『文化』23号, 駒沢大学文学部文化学教室, pp.43-64。

Kendall, Laurel

1983 Caught between Ancestors and Spirits: Field Report of Korean mansin 's Healing kut, in: The Korean National Commission for UNESCO (ed.), Korean Folklore, Seoul: The Si-sa-yong-o-sa Publishers, Inc, pp.107-140.

1985 Shamans, Housewives and Other Restless Spirits, Honolulu: University of Hawaii Press.

金 賢珠

1995 「巫仏祭儀를 통해서 본 韓國人の 죽음觀念——死靈굿과49齋의 比較 研究」梨花女子大学校大学院1994年度碩士学位請求論文（ソウル）。

李 杜鉉, 千 鎮基

1995 「종교와 무속」『韓國의 郷村民俗誌（Ⅱ）——全羅南道篇』韓国精神文化研究院（ソウル）。

中村 元

1989 『中村元選集決定版第4巻・チベット人・韓國人の思惟方法』春秋社。

岡田浩樹

2001 「沈黙する多数派——韓国仏教の「過去」に関する試論」三尾裕子・本田洋編『東アジアにおける文化の多中心性』風響社, pp.45-83。

朴 柱彦

2005 「珍島사람들의 주검처리방식과 왜덕산 (倭徳山)」珍島学会第5回国際學術會議『丁酉再乱과 珍島』(ソウル), pp.29-38。

佐々木宏幹

2002 『〈ほとけ〉と力——日本仏教文化の実像』吉川弘文館。

鈴木文子

2001 「西海の離島にみる時代変化——信仰の世界を手がかりに」『アジア遊学』30号, 勉誠出版, pp.129-142。

雨龍

1999 『영가천도』효림（ソウル）。

円仏教中央総務部教政院教化部

1977 『円仏教全書』円仏教出版社（裡里）。

円仏教教学教材研究会

1989 『円仏教概論』円光大学校出版局（裡里）。

任 敦姫

1988 「한국조상의 두 얼굴——조상덕과 조상탓」『韓國民俗学』21（ソウル）, pp.133-171。

柳 東植

1978 『民俗宗教와 韓國文化』現代思想社（ソウル）。